



かつて地雷が埋められていた場所が天然の綿畑に。真っ白なオーガニックコットンが栽培されている



PLAYERS

国際協力の担い手たち

NPO法人 Nature Saves Cambodia-Japan

綿畑であいましょう

長年にわたる内戦の末、いまだ多くの地雷が眠るカンボジア。すべての地雷を取り除き、一面を天然の綿畑にできたなら。NPO法人Nature Saves Cambodia-Japanのメンバーは、人々の幸せを願い活動を続けている。

**人と人の縁がつないだ
NGOの誕生**

「新しいパンフレットのデザインはどうする?」
「表にはロゴを載せた方が分かりやすいよね」
「団体のミッションも入れたら?」
日曜の昼下がり、東京都内の閑静な住宅街。テーブルを囲んで議論しているのは、NPO法人 Nature Saves Cambodia-Japan (NSCJ) のメンバーたち。今日のトピックは、団体の新し



村の女性に手紡ぎの技術指導をする岡本さん(右)。「やる気も技術もある。レベルの高い製品作りができると確信しています」



© Maki Ishii

いパンフレットのデザイン。休日にもかかわらず、この日は8人のメンバーが集まった。

作家の山本賢蔵さん、写真家の石井麻木さんを代表に、2009年に産声を上げたNSCJ。団体のロゴはふわふわの「綿」。活動の目的は「地雷原を天然の綿畑にすること」だ。

「見てしまった、知ってしまった責任」
石井さんは、NSCJをライフワークの一つに加えた理由をそう話す。フ

アインダーを通してさまざまな世界を見てきた彼女にとっても、それだけ、カンボジアの地雷被害者との出会いは衝撃だった。内戦時代に埋められた地雷は400万〜600万個。一面の綿畑もさら地となり、今もそこには、人々の「脅威」として地雷が眠っている。

かつてテレビ局の記者だったという山本さんは、カンボジアに駐在していた時、身近な人たちが地雷被害で苦しむ姿を目の当たりにした。転機となったのは、地雷で足を失った夫婦との出会い。「彼らと一緒に希望の種を育てられたら」と、退職後に本業のかたわらNGOを立ち上げた。



若い世代の人も織物作りに多くかかわってくれるようになってきた

手と手を携えて 歩み続ける

地雷原でのオーガニックコットンの栽培と併せて、もともと現地の人々の雇用につながるできないか。そこでNSCJがもう一つの活動の柱に据えたのが、栽培した綿を使った織物の製作。しかし内戦の時代を経て、多くの家庭では、代々受け継がれてきた技術が失われてしまっていた。

な彼女らの声を聞き、蔵の中に眠っていた糸車をひっぱり出し、大工に修理してもらった。すると糸車に触れた瞬間、昔の感覚を思い出したかのように、彼女らは糸を紡ぎ始めたのだ。その軽やかな手付きは、魔法のようにも見えた。

昨年秋には、NSCJの心強いメンバーの一人、織物作家の岡本昌子さんがカンボジアに飛んだ。素材も技術もそろっている。あとは売れるものが作れるように、デザインや品質に「ひと工夫」が必要だと、彼女がひと肌脱ぐことになったのだ。「良いものが作れるなら何でも学びたい」。どの村を訪ねても、次々と質問が投げ掛けられた。カンボジアに初めて足を運んだという岡本さんは、「この国の人たちが、自信を持って織物作りに取り組めるようになるまで、共に悩み、共に喜び合いながら歩んでいきたい」と話す。

NSCJには専任のスタッフはいない。みんな本業を持ちながら、ボランティアベースでの活動だ。現地に足を運ぶメンバーもいれば、日本で縁の下で活動を支えるメンバーもいるが、その思いは一つ。「一歩ずつ着実に、身の丈に合った活動を続けていきたい」という。とはいえ、プロジェクトの進め方、資金繰り、広報のアプロ



JICAのアドバイザー派遣制度を通じて、NGO運営の経験豊富な山崎唯司さん(左手前)のアドバイスを受けるNSCJのメンバー。柳田さん(右端)は「それぞれの専門性を生かして、地道に、着実に支援していければ」と話す

イチ。カンボジアでより良い活動をするために、取り組むべき課題は盛りだくさんだ。そこで事務局長の野澤敦子さんはJICAの研修に参加したり、他のNGOと情報共有を図ったりと、組織力の強化に奔走している。「一人では何もできない。日本とカンボジアの仲間たちと、知恵を出し合いながら歩み続けていきたい」。そんな彼らの地道な活動が目にとまり、キューピー株式会社の社会貢献活動「QPeace」※の支援団体に選ばれるなど、国内でもサポーターの輪が広がり始めている。

※キューピーの従業員が社会・環境団体に行う寄附をサポートする取り組み。従業員は毎月100円1口を給料から天引きし、会社側は従業員の積立金と同額を支援するシステム。